

# 中等国語科における文法意識を育てる指導

岡 利道

## 一、文法意識を育てる指導

### (一) 文法意識について

ある辞書(『広辞苑』第五版)を参考にすると、「文法」・「意識」とは、おおよそ次のように説明できるであろう。

文法とは、様々な事象に内在するきまり・約束ごと(広義)である。正しいことは遣いの規則だと言ってもよい。特に、規範文法を指すこともある。具体的に言うならば、一つの言語を構成する語・句・文などの形態・機能・解釈やそれらに加えられる操作についての規則のことである。意識とは、人間の精神活動であり、対象をそれとして気にかけることである。例えば、「周囲の目を意識する」のように使う。特に、社会意識や自己意識(自覚)を指すこともある。「意識の高い労働者」が、その例である。そして、意識の反対語は、無意識である。

以上のことをふまえ、「文法意識」というものを、私なりにまとめてみる。それは、国語学習、あるいは言語生活

において、語・句・文などの形態・機能・解釈やそれらに加えられる操作についての規則を、常に気にかけて、自覚し、それら(国語学習・言語生活)の質を高めようとする心のはたらきのことである。

### (二) 「文法意識」というものの価値

本稿の標題を、「中等国語科における文法意識を育てる指導」とした。教育の場において、それを大切にしようという意図である。それは、すでに、藤原・岡(二〇〇二)で示している。以下のような指針である。

言語教育の中核をなすものは、文法教育である。人間は、文法(表現法)によって、言語生活の正常を保持している。このような文法教育を対象に取り上げる仕事は、人間教育の時・所・位のすべてに生かされなくてはならない。

□ 文法意識

文法は、思考力強化のため、重視されなくてはならない。

思考力強化に努める中に、おのずから文法が意識されるようであればよい。

この文法意識の涵養をめざし、学校教育の、とりわけ国語の教科において、息長く指導していくことが主眼である。

(三) 文法意識を育てる指導の原理

読むことの指導に焦点を当てる。藤原(一九七四)によれば、「読解の原理と読解教育の原理」として、主要な項目が次のように並んでいる。

◎ 読解の原理

第一原理 その意を得る

第二原理 深読

第三原理 主観的判断の自覚と抑制

◎ 読解教育の原理

第一原理 文章対面の教育を重んじるべきこと

第二原理 素材読み指導

作業内容 1 素材の把握

作業内容 2 語義の探索

作業内容 3 文章大意の理解

第三原理 文法読み指導

第一作業 全文章についての、段落の読みわけ

第二作業 一段落そのものの読みわけ

第三作業 センテンスについての主部・述部の見

わけ

第四作業 修飾部の見わけ

第五作業 語句のはたらきの追求

第六作業 微視と巨視

第四原理 表現読み指導

第一作業 表現全局への展望のもとで、たいせつ

な部分にくい入り、その微視に徹底

することによって、表現全体の統合的

な把握におもむく

第二作業 全体を直視しつつ統合把握におもむく

第三作業 深く、人間・社会・思想を読みとって

いく

第五原理 読解指導と読書指導との一元化

ここにある「文法読み指導」が、文法意識を育てる指導そのものである。「読解教育の原理」が五つある中で、その中心部に位置するものが「文法読み指導」である。

(四) 文法意識を育てる指導の具体像

では、指導の具体像を見てみよう。藤原(一九七〇)より、主要なものを示すことにする。

○ 「千羽鶴」(川端康成・文学)の場合

《文法読み》【表現読み】

文芸を読み、それを理解して、高度の鑑賞にまで至るといふような読解を、文学教育で考えたばあは、「素材読み」、「文法読み」、「表現読み」という三段階法のルールが、やはり有効であることを、なお申してみた。ここに、川端康成の『千羽鶴』の文章がある。

太田夫人のために稲村令嬢がまた点前をした。一座の目はその方に注がれたが、この令嬢はおそらく黒織部の茶碗の因縁も知らないのだろう。習つた型通りに所作をしてゐる。

癖がなく素直な点前である。姿勢の正しい胸から膝に気品が見える。

若葉の影が令嬢のうしろの障子にうつつて、花やかな振袖の肩や袂に、やはらかい反射があるやうに思へる。髪も光つてゐるやうだ。

茶室としては無論明る過ぎるのだが、それが令嬢の若さを輝かせた。娘らしい赤い袱紗も、甘い感じではなく、みづみづしい感じだった。令嬢の手が赤

い花を咲かせてゐるやうだった。

令嬢のまはりに白く小さい千羽鶴が立ち舞つてゐさうに思へた。

太田夫人は織部の茶碗に掌を入れて、

「この黒に青いお茶は、春の緑が萌え出たやうでございますね。」

と言つたが、亡夫の所持であつたとは、さすがに口に出さなかつた。

その後で型だけのお道具拝見があつた。令嬢たちは道具のことなど詳しくないので、だいたいちか子の説明を聞いてゐるだけだった。

水差も茶杓も前に菊治の父のものだったが、ちか子も菊治もだまつてゐた。

(中略)

隣室では、ちか子が近しい弟子二三人と女中とを相手に、後かたづけをしてゐた。

「太田さんの奥さんがなにを言つたんですの。」

「別に……。なんでもない。」

「あの人は用心なさいよ。しをらしさうに見せて、いつも自分には罪がないといふ顔をして、なにを考へてるか分らないところがあるから。」

「しかし、あなたの茶会にはよく来るんでせう？  
いつごろから。」

と、菊治はいくらか皮肉に言った。

この毒氣をのがれるやうに表へ出た。

ちか子がついて来て、

「いかがでした。いいお嬢さんでせう。」

「いいお嬢さんですね。しかし、あんたや太田さんや、父の亡霊のうろつかないところで会つたら、なほよかつたでせうね。」

「そんなことに神経を使つてらつしやるの？ 太田の奥さんなんて、あのお嬢さんになんの関係もありませんよ。」

「僕はお嬢さんに悪いと思つただけですよ。」

「どうして悪いんでせう。太田の奥さんの来てゐたことがお気にさはずなら、お詫びしますが、今日は呼んだわけぢやありません。稲村のお嬢さんのことは、別にお考へになつて。」

「しかし、今日はこれで失礼します。」

と、菊治は立ち止まつた。話しながら歩いてゐては、ちか子が離れさうもなかつた。

菊治は一人になると、目の前の山裾につつじのつぼみを持つてゐるのが見えた。深い呼吸をした。

ちか子の手紙に誘はれて来た自己嫌悪は感じたが、千羽鶴の風呂敷の令嬢の印象は鮮明だつた。

同座に父の女を二人見たことが、それほど鬱陶し

く残らないのも、あの令嬢のせみかもしれないなかつた。

しかし、二人の女が現に生きて父を語つたのを思ひ、一方で母が死んでゐるのを思ふと、菊治はなにか憤りも湧いて来た。ちか子の胸の醜いあざが目に見えたりした。

夕風が若葉を伝わつて来るのに、菊治は帽子を脱ぎながら、ゆつくり歩いた。

山門の蔭に太田婦人の立つてゐるのが、遠くから見えた。

とつさに菊治は道を避けようとして、あたりを見廻した。左右の小山に上つたら、山門のところを通らずにすみさうであつた。

しかし、菊治は山門の方へ歩いて行つた。少し頬がこはばつてゐるやうだつた。

私どもの、かれこれと言う余地もない、川端康成の文章である。それだけに、と申したい。「素材読み」、「文法読み」、「表現読み」というような理的追求が、自由自在にできることを、見ていきたいと思う。一つに、接続詞の「しかし」というのが、会話文に三つ、地の文に二つ、あわせて五つ出ている。読解において、接続詞をとりあげるのは、「文法読み」の、まったく常道とも言つてよい仕事である。右の文章で、川端は、逆接に、「しかし」という接続詞を用いて、たと

えば、「けれども」といったような接続詞は、使っていない。「しかし」、二人の女が現に生きて父を語つたのを思ひ、…なにか憤りも湧いて来た。「この「しかし」のことはづかいを見ると、私どもは、その「しかし」の下の、「間」の大きいこと、そこに、静かな時間之余裕があることを、読みとらざるをえない。他の「しかし」についても、同様なことが言える。これをくらべて、「しかし」のことはづかいを吟味しているうちに、私どもは、いわゆる「表現読み」として、作者のおちついた表現態度というものを、味わうことができる。

「しかし」との関連においてとらえられるのが、接続助詞の「が」である。「一座の目はその方に注がれたが、」の「が」をはじめとして、終わりの、「ちか子の手紙に誘はれて来た自己嫌悪は感じたが、」の「が」に至るまで、会話文中の一つをふくめて、六つの「が」が出てくる。これまた、「くたが」を、「くたけれども」と言つたりはしないで、「が」一色である。「文法読み」の一つの整理をすると、川端の右の文章は、「しかし」と「くが」の文章だと言うこともできる。「けれども」ではない、「が」、そのところにもまた、休止、間の大きいのを、読みとることができる。静かなおちつきが、そこにあると言える。そう見てくれば、もはや「表現

読み」である。川端康成の表現の世界に見られる美しさの要因として、「しかし」のことはづかいや、「くが」ということはづかいのささえる、静かき、余裕感というものがあることは、いなめないのではないか。

すぐれた、川端の文章が、こうして、私どもに、そのよさの、たんねんな、理的な追求をさせてくれる。どんなばあいにも、私どもは、理的方法をおして、作者の文章表情の頂上にまでよじのぼることができるのではなからうか。

○「山の音」（川端康成・文学）の場合

《文法読み》【表現読み】

右に述べたことを、同じ川端康成の『山の音』で、さらにたしかめてみたい。

八月の十日前だが、虫が鳴いてゐる。

木の葉から木の葉へ夜露の落ちるらしい音も聞える。

さうして、ふと信吾に山の音が聞えた。

風はない。月は満月に近く明るい、しめつばい夜気で、小山の上を描く木々の輪郭はぼやけてゐる。

しかし風に動いてはゐない。

信吾のゐる廊下の下のしだの葉も動いてゐない。

鎌倉のいはゆる谷の奥で、波が聞える夜もあるか

ら、信吾は海の音かと疑つたが、やはり山の音だつた。

遠い風の音に似てゐるが、地鳴りとでもいふ深い底力があつた。自分の頭のなかに聞えるやうでもあるので、信吾は耳鳴りかと思つて、頭を振つてみた。

音はやんだ。

音はやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそはれた。死期を告知されたのではないかと寒けがした。

風の音か、海の音か、耳鳴りかと、信吾は冷静に考へたつもりだったが、そんな音などしなかつたのではないかと思はれた。しかし確かに山の音は聞えてゐた。

魔が通りかかつて山を鳴らして行つたかのやうであつた。

急な勾配なのが、水気をふくんだ夜色のために、山の前面は暗い壁のやうに立つて見えた。信吾の家の庭にをさまるほどの小山だから、壁と言つても、卵形を半分に切つて立てたやうに見える。

その横やうしろにも小山があるが、鳴つたのは信吾の家の裏山らしかつた。

「八月の十日前だが、」月は満月に近く明るいのが、「遠い風の音に似てゐるが、」それから、「信吾は冷静に考へたつもりだったが、」いちばん最後に、「その

横やうしろにも小山があるが、」このように、いくつもの逆接の「が」が出てくる。「けれども」は使われていない。前にも述べたように、「が」という特色が見られる。『千羽鶴』の実例と、この「山の音」の実例とをあわせ見て、川端康成が、逆接の「が」という接統助詞を、とくに選んで使用していることを、指摘することができる。この接統のことばは、まさに川端の文章の特色であり、「が」のあとに、間の大きいことが感じられる。大きくて、そこに静かさがある。逆接にしても、ゆるい逆接ということになる。作者は、いわば、情を出すために、——情の深さを思つて、逆接のばあいの接統助詞「けれど、けれども」は選ばないで、おのずから、「が」を選んだのかと思われる。接統助詞「が」の、表現味、表現効果を、じゅうぶんに、ここで、理解することができる。

文法に注視した理的な追求が「文法読み」である。このときの文法は、「語・句・文などの形態・機能・解釈やそれらに加えられる操作についての規則」の意味である。

川端の文章の「文法読み」が好例となる。接統詞「しかし」・接統助詞「が」のはたらきを追求する。微視と巨視の相関を捉えていく。このような経験を学習者に積み重ねさせることによつて、「文法意識」の涵養へと向かうので

ある。

## 二、最新の動向の一つ

——日本ブッククラブの研究的な取り組みについて——

### (一) 有元氏の基本的な考え方

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 基礎研究部 統括研究官の有元秀文氏が主宰されている日本ブッククラブの活動を、最新の動向として取り上げる。もちろん、他の研究的な取り組みもあり、それぞれの概略を列挙する方法もあるだろう。が、私自身がそれぞれに出向き、体験を伴ったものとなげば、真に責任を持った報告とはならない。要諦は、研究会へ実際に参加し、自身の目で見、耳で聞いた内容をもとに述べていくことである。同クラブの動向を取り上げる所以である。

### ①ブッククラブとは何か

二〇〇九年四月二五日(土)、三重県教育文化会館において、第二回ブッククラブ研究会が行われた。有元氏による基調講話の題目は、「PISA型読解力」の弱点を克服する「ブッククラブ」入門——多読と討論で、PISAに対応できる読書力とクリティカル・リーディングを育てる——であり、PISA型読解力をつけることが強く意

識されていることがわかる。以下、当日資料に沿って、あるいは私自身のメモに従って、ブッククラブがめざすものを整理してみよう。

ブッククラブとは、多読とクリティカル・シンキング(健全な批判精神を持った、客観的な思考のこと。具体的には、論理思考と、思考の効率を上げるための方法論(テクニクやフレームワーク)、そして正しく思考するための姿勢(心構え)を組み合わせることににより、「物事を正しい方法で正しいレベルまで考える」ことを目的としている)を重視し、ディスカッションを通して読解力の向上を図る読書法である。

ブッククラブの目的は、次の五つである。

○ 読んだことについて話し合うことで、一人で読んでいた時にはわからなかった読み方ができ、お互いの読みが深まり読むことが楽しくなる。

○ 同じ本と一緒に読むことでお互いの人柄や考え方がわかり、お互いの結びつきが強まる。

○ 読んだことを、自分とはかけ離れた遠い世界のことではなく、自分の問題として考え、自分の人生に役立てることができるとができる。

○ 多読をさせるとともに、教師が質問し、作品の本質を捉えるために討論することで、読書力、読解力、言語力を育てる。

○ 十分な教材理解と教材解釈に基づいてクリティカル・

リーディングを行い、「国際的な読解力」を育てる。

アメリカの場合、ブッククラブは、およそ次のように行われている。

#### ◇かける時間

絵本などの短い物語を読んで、一時間程度で終わるものから、単行本を毎時間一章ずつ読んで、何時間もかけるものまである。

#### ◇言語活動

幼児や小学校低学年は読んで話し合うだけの活動だが、小学校中・高学年以降はリーディング・ログ（日本では読書ノート）、人物相関図などを含むウェブ（日本ではマップ）、ジャーナルやブックレポート（日本では読書感想文）などの「書く学習活動」を含めた単元学習として行われる。

#### ◇実施形態

学校の授業として行われるもの、授業外として行われるもの、保護者が課外活動として行うもの、保護者同士で行うもの、教師たちが自己研修のために行うもの、成人が仲間と楽しみで行うものなど、多様である。

#### ◇指導法

漫然とした読書会とは異なり、作品の本質を理解するために、教師が予め用意した質問に答えさせたり、本文に書いてあることに注目させたり、予備的な知識について

の調べ学習をさせたりすることなどがある。

#### ②ブッククラブの基本仮説とその根拠

仮説は二つある。一つ目は、「できる限り大量の本を、子どもの関心意欲を大切にしながら、教師の質問や子ども同士の話し合いを通して読むことが、読解力の向上には最も効果的である。」である。

その根拠は、三つある。

一つ目は、日本で行われる国語の授業が、ブッククラブに比べて極端な精読であり、読解力を育てるには効率の悪いやり方だからである。PISSA型読解力テストの得点が低く、読書量も低く、国語が嫌いな教科のトップにあることは、その証拠であろう。

二つ目は、先進国の国語教育は、精読は行わず、多くの本を読ませる多読が主流であり、特にアメリカではシャワーを浴びるように多くの本を読ませることによって読解力向上を図っている。

具体的には、普通の絵本なら一時間以内で読み終わり、アメリカでは、小学校低学年の場合、ブッククラブ型の授業で、一日に二、三冊を読み、年間二百から三百冊読ませることが普通である。

三つ目は、同じ本を集団で読ませ、読んだことについて話し合わせるブッククラブ型の授業は、教師が主導して質



問して答えさせる普通の国語（アメリカでは英語）の授業より明らかに読解力がつくことを、『読書はパワー』（金の星社）の著者は多くの実験結果をもとに立証した。

第二の仮説は、「テキストの表現（叙述）を重視した（教材理解）と（教材解釈）が十分に行われないと、質の高い（クリティカル・リーディング）は行えない。」である。

そのために、教材研究にあたって、テキストの文章表現を重視した（教材理解）と（教材解釈）を十分に行い、指導にあたって、テキストの（理解）と（解釈）を徹底的に行って、読解力の向上を図る。

### ③ 教師の発問（例）

ブッククラブにおける基本的な問は、六種類である。以下、それぞれ、問の名称、解説、具体例を示す。

○ パーソナル・リーディング（総合的印象）の問：個人的な、かつ総合的な印象を聞く問

- ・ どこがいちばん面白かったですか？
  - ・ どの登場人物が好きですか、嫌いですか？
  - ・ 疑問に思ったことはありませんか？
  - ・ 変だな、おかしいなと思ったことはありませんか？
- 理解読みの問：テキストの文章に書いてある内容を正確に理解させるための問

・ このお話で、最初の問題（困ったこと）は何でしたか？

・ 〈登場人物たち〉は、その問題をどう解決しましたか？

○ 解釈読みの問：テキストの文章には書いてないことで、テキストに書いてあるいくつかの手がかりを関連させて推論する必要のある問

- ・ 〈登場人物〉は、なぜ（○○の行動）をしたのですか？
- ・ 作者は、どうして（○○の表現）をしたのですか？
- ・ このお話は、どのようなことを教えようとしているのですか？

○ クリティカル・リーディングの問：登場人物の行動やテキストの表現について評価したり批判したりする問

- ・ このお話の終わり方をどう思いますか？
- ・ 他にもつとよい終わり方はある？ 他の終わり方を考えてごらん？

・ 〈特定の登場人物の行動〉についてどう思いますか？

○ クリエイティブ・リーディングの問：自分が登場人物や作者になつたつもりで、自分独自の創造的な読みをするように仕向ける問

- ・ あなたが〈登場人物〉だったら、どうやって問題を解決しますか？
- ・ あなたが作者だったら、どういう終わり方（文章表現）にしますか？

・ この後、どういってお話になると思いますか？

○ パーソナル・リーディングの問：テキストを離れて、自

分や自分が住む現実世界の問題として考えさせるような問

・あなたにも似たようなことがありましたか？ その時、あなたはどうしましたか？ 今度同じことが起きたら、どうしたいですか？

・あなたは、この〈登場人物〉とどこが似ていますか？ どこが違いますか？

・似たようなお話を讀んだことがありますか？ そのお話と、どこが似ていて、どこが違いますか？

## (二) 中学校・高等学校での指導

——学習者に身につけさせるべき思考の道具(例)——

有元氏に続いて、新潟市立鳥屋野中学校教諭の本多豊氏、三重県立津西高等学校教諭の澤口哲弥氏から、演習形式で指導例の説明があった。その概略を示すことにする。

### ① 中学校

本多氏は、現在のところ、一年間に、教科書単元以外の読書単元として、二つのブッククラブ単元を実施されている。それは、次のものである。

A 短い絵本や詩などで、〈ヘリーディング〉と〈ディスプレイション〉を、一時間から二時間かけて行うもの。

B 短い物語や短編小説で、〈ヘリーディング〉〈ライティン

グ〉〈ディスプレイション〉の三ステップを、三時間から四時間かけて行うもの。

本多氏も、教材文に書かれていることを正確に理解する(教材理解)、書いてあることを手がかりにはつきり書いてないことを推論して解釈する(教材解釈)、十分な理解と解釈に基づいてクリティカル・リーディングする、という三段階を踏む必要があると主張された。

教材理解や教材解釈が不十分なままでクリティカル・リーディングをしようとすると、極めて根拠の怪しいクリティカル・リーディングになってしまう。それを防ぐために、話し合ってみたい課題を出させる前段階として、シークェンス・チャート(構成表)、キャラクター・マップ、ウェブ、シンク・シートなどを使って、あらずじ、登場人物の性格や作品の中での役割、相互関係、心情や行動の時間的変化などをわかりやすく、しかもできるだけ短時間で整理するようにしたと説明された。後の資料編で、シークェンス・チャート(構成表)とシンク・シートのフォーマットを掲載する(前出A・BのうちのBのタイプ)。これらが、ここでいう「学習者に身につけさせるべき思考の道具」である。

なお、使用する教材は、「ある夜の物語」(星新一『未来いそぶ』新潮文庫)である。また、単元目標は、次の二つである。一つ目が、「本文最後の「サンタクローズは、もしかしたら、きょうもつとも楽しさを味わったのは自分

ではないかと思つた」の理由を、作品全体から推論し、解釈することが出来る。」である。二つ目は、「望みがかなえられる権利を人に譲るといふ登場人物たちの選択について、自分だつたらどうするだろうかと考え、相互批判を通して、この作品が提起している問題を自分の問題として考えることができる。」である。

## ② 高等学校

澤口氏も、基本的には、本多氏と同様な考えのもと、特にデイスカッションを大切にされ、そのトレーニングをきちんとしていきたいと主張された。根拠を持つた発言、類推したこと、発言をさせるトレーニンングである。「学習者に身につけさせるべき思考の道具」としては、特に、構成チャート(志賀直哉「城の崎にて」の場合)とウェブ(横光利一「蠅」の場合)が有効だとのことである。その二つの例は、後の資料編に掲載しておく。なお、研究会当日のウェブは、ホワイトボードに書(描)かれたものであるため、写真で示しても読み取りづらい。そのため、ここでは、有元氏が作成されたものを使わせていただくことにする。

## 三、考察

再確認する。本稿の標題は、「中等国語科における文法

意識を育てる指導」である。昭和三〇、あるいは四〇年代の頃から主張された「文法読み」は、最新の「ブッククラブの読み」とは異質なものであるか。比較することにより、自ずと文法意識を育てる指導の特質が浮び上がるであろう。

「ブッククラブの読み」では、「読書力、読解力、言語力を育てる」となっている。「文法読み」では、その三つの力を育てることができないのであろうか。

二―(一)―②に、「日本で行われる国語の授業が、ブッククラブに比べて極端な精読であり、読解力を育てるには効率の悪いやり方」とあつた。その極端な精読が全面的に「文法読み」となるわけではなからうが、矛先が向けられていることは間違いないだろう。確かに「文法読み」は、かなり分析的、微視的な、いわゆる精読一辺倒だとのイメージを与えがちである。

しかし、一―(三)で見たように、「読解教育の原理」の最終段階で「読解指導と読書指導との一元化」という理念が位置づいている。さらに、その『私の国語教育学』では、「私どもは、どこまでも、深く読むことを重んじたいと思う。そして、そのような読みに、もし時間がかからねば、それはたつとことだとしていた。時間をとることなくして、早くも深い読みにはいっていくことができたなら、それは、読みとして理想的である。深読、速読、熟読を、あ

らためて、私どもの読書生活の内面の問題としたい。」とも論及されている。両者めざすところは同じだ、と考える。

第二回ブッククラブ研究会に立ち戻ろう。本多氏、澤口氏の模擬授業的ワークシヨップにおいて、様々な作業が展開された。その途上で、有元氏は、「本当にそう読めるんですか!」「なぜそう言い切れるんですか?」と両氏に、参加の私たちに、執拗に問いかけてこられた。クリティカル・リーディングの真髄を見たような思いであった。

その執拗なまでの追究姿勢は、藤原氏も同様であった。『国語教育の創造』を作る途上、合間の時間に、大学生相手に「文法読み」を実践されていた時の体験談(思ひ出話)をよく聞かせていただいた。「参考書や注釈書を鵜呑みにしないこと」「自分でとことん調べ抜いていくこと」を指導されたそうである。学習者に対する言葉「本当にそう読めるんですか!」「なぜそう言い切れるんですか?」は、奇しくも一致する問いかけの表現である。学習者の立場になるならば、「ズレの感知―つきつめる―新たな立ち向かい」(広岡(一九七二))の中で、まさに息づまるほどの緊迫した学習のよろこびを味わうに違いない。

ただし、語句・文(ひいては文章)表現を、厳しく見つめ、言葉そのもので解釈するという面は、「文法読み」が特質とするところである。それに匹敵する「ブッククラブの読み」の真骨頂は、徹底した図解的把握(可視化)ののちに、

討論による考えの練り上げをしていくという面である。

ここに、改めて、「文法読み」そして「文法意識を育てる指導」の価値を確認することができた。歴史的に見れば、古いものである。しかし、新しいものとしての「ブッククラブの読み」に通底するものを多く蔵している。「文法読み」そして「文法意識を育てる指導」の実践研究を推進するという基本は守り、新たな「ブッククラブの読み」の研究などの動きも押さえつつ、僅かずつではあるが、探究の歩を進めていきたいと考える。

#### 引用・参考文献

- 有元秀文(二〇〇九)『PISAに対応できる「国際的な読解力」を育てる新しい読書教育の方法―アニメーションからブッククラブへ―』少年写真新聞社
- 広岡亮蔵(一九七二)『学習過程の最適化』明治図書出版
- 藤原与一(一九七〇)『理の国語教育と情の国語教育』新光閣書店
- 藤原与一(一九七四)『私の国語教育学』新光閣書店
- 藤原与一・岡利道(二〇〇一)『国語教育の創造』三弥生書店

#### 付記

本稿は、本学で行われた「教員免許状更新講習」中学校高等

学校選択コース・国語科（平成二十二年八月）テキストの岡の執筆部分をもとに加筆修正をしたものである。

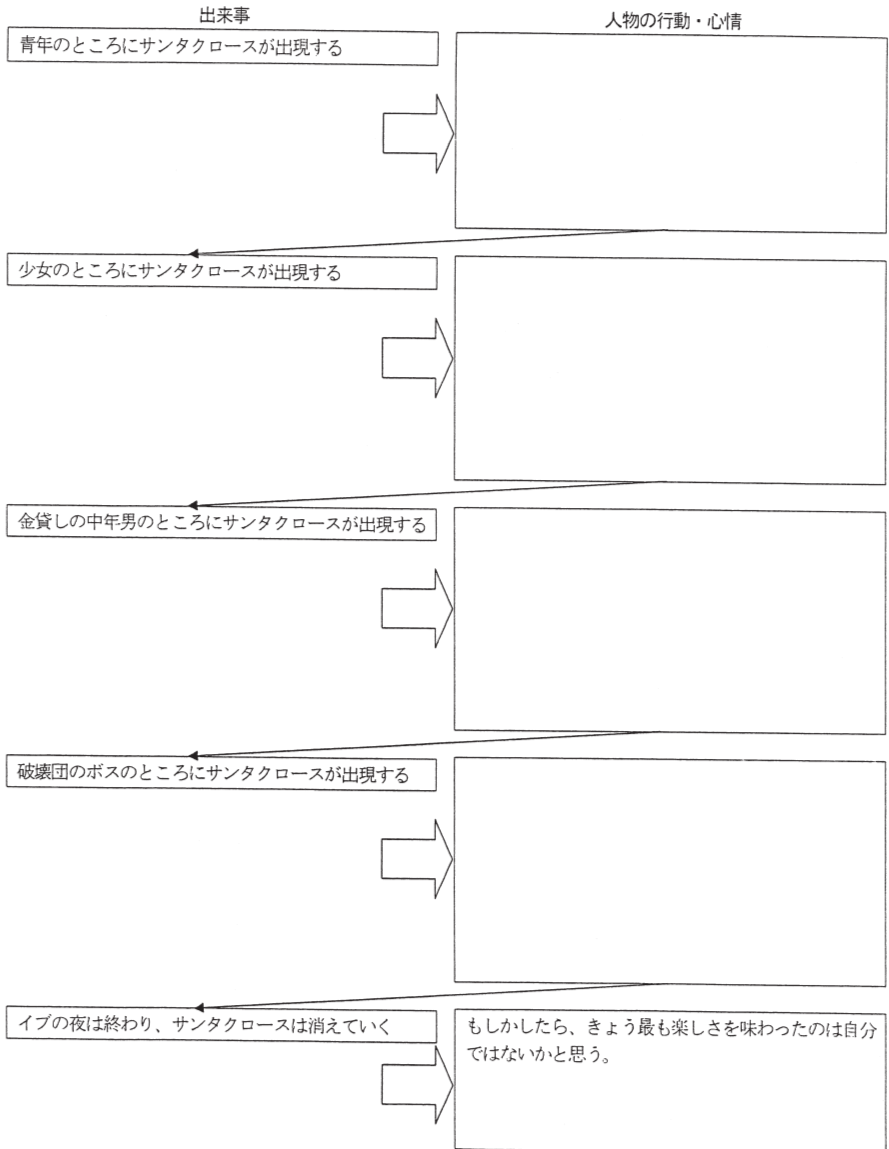
#### 資料

以下、①「ある夜の物語」シーケンス・チャート、②同シンク・シート、③「城の崎にて」構成チャート、④「蠅」ウエブの順に掲げておくことにする。

（本学教授）

# 「ある夜の物語」

シーケンス・チャート



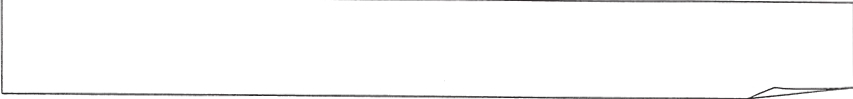
## 「ある夜の物語」

シンク・シート

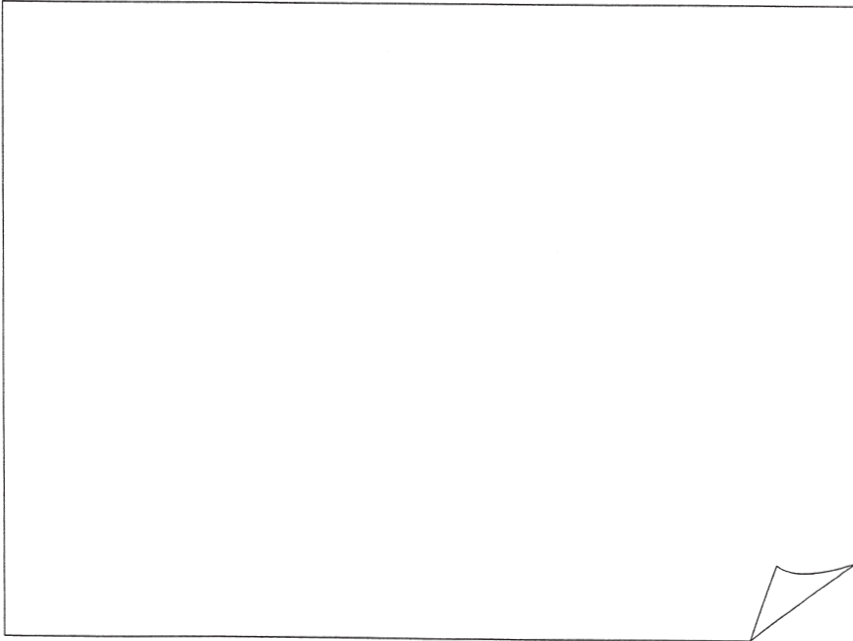
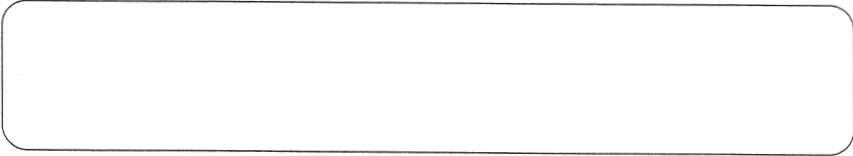
1 どこが印象に残ったか・どんなことを考えたか



2 何か疑問に思ったこと・不思議だと思ったこと・みんなで話し合ってみたいことは何か



今日のブッククラブの課題



「城の崎にて」の構成チャート

場面	1	2	3	4	5	6	7	8
P	122	123	124	126	127	129	129	130
主体	自分	自分	はち	ねずみ	自分	葉	いもり	自分
できごと	けがをして温泉にきた。	清い流れにきた。	忙しそうに働いていた。はちが死んでいった。	串が刺さった。ねずみがどうかして助かろうとしている。	けがのときの自分を回想できるだけのことをしようとした。	葉が動く。風が吹くと動かない。	石を投げたら死んだ。	はちは土の中だろう。ねずみの死体は海岸だろう。死ななかった自分は歩いている。
自分の感情	静かない気持ち	静かない気持ち	静かで寂しかった	寂しい嫌な気持ち	死の恐怖に襲われなかった。		とんだことをした。妙な嫌な気。生き物の寂しさを一緒に感じた。	感謝しなければ済まぬ気もしたが喜びの感じは起らない。
考え		死ぬことが怖くない。いつかはそうなる。死に対する親しみが起こった。		願っている静かさの前に苦しみがあることが恐ろしい。	助かろうと思うのはねずみと変わらない。気分が願うことが影響してもなくても「あるがまま」で仕方ない。	何かでこういう場合をもっと知っていた。	自分は偶然に死ななかった。いもりは偶然に死んだ。	生きていることと死んでしまっていることは両極ではない。それごとに差はないような気もした。



「蠅」ウェブ

